『最後の早慶戦』
復刊プロジェクト

戦後80年の節目に、後世に語り継ぐべき物語を復活させたい。

昭和18年10月16日
学徒出陣壮行早慶戦が敢行された

戦争が激化する中で行われた最後の早慶戦。
試合後、勝利した早大応援団から「ガンバレ、ガンバレ慶應」の声がわき上がり、慶大側は全員帽子を振って「ありがとう。ありがとう。」と応え、今度は「ガンバレ、ガンバレ早稲田」の声。そして早慶の学生達が一緒になって『若き血』『都の西北』を涙を流しながら高らかに歌った。
やがてどこからともなく沸きおこった『海ゆかば』のメロディー。そこに早稲田も慶應もない。選手は互いを励ましあい戦場へ飛び立ち、そのまま二度と還らぬ人もいた。
まさに「最後の早慶戦」となった。

なぜ今、この本を復刊するのか

戦争を知る人が少なくなる今だからこそ、我々が責任をもって語り継がなければなりません。この本は単なる野球の記録ではありません。戦争により青春を突然断ち切られた学生たちの「生きた証」でもあります。
今の平和な日本があるのは、先人たちの犠牲や努力の上に成り立っている。早慶戦や様々なスポーツ、仕事や趣味に打ち込めることは当たり前ではないのです。それが叶わなかった人たちがいることを忘れてはいけません。

あなたのご支援で、この物語を未来へ。

詳細はこちらから

CAMPFIRE クラウドファンディング期間

2025.10.10〔金〕–12.21〔日〕

私たちが実現したいこと

- 絶版書籍の復刊
- 電子書籍化による保存
- 専用ホームページ立ち上げ
- 漫画化

スポーツを通して命の尊さを語り継ぐ

～ 最後の早慶戦 復刊への想い ～

受け継がれる想い、紡がれる記憶

私はこの本を読むまでは、戦争はどこか遠くの国の話だと思っていました。しかし、この本を通じて、戦争を「自分ごと」として捉えるようになりました。私たちは、運良く生き延びた人の末裔で、少し違えばこの世に生を受けることはなかったのだと思います。平和な日常は当たり前ではない。それが叶わなかった人たちがいることを忘れてはいけないと思います。
また、戦時中においても、飛田先生、小泉塾長のリーダーシップ、学生たちのスポーツマンシップが貫かれていた。その事実に触れ、塾員として、また一人の日本人として大きな誇りを覚えました。最後の早慶戦は、後世に語り継ぐべき物語だと信じています。

祖父の松尾俊治が遺した言葉

> 最後の早慶戦、本当にあの時はそう思った。
> 選手も応援の学生も戦場へ行けば間違いなく死ぬのだという
> 一種の感情の燃焼があった。球場全体が悲壮感に溢れていた。
> 試合後、涙を流しながら一つの塊となって応援歌を歌い続けた。

この言葉を還らざる球友に捧げ、出来る限り語り続けたいという祖父の意思を、私たち家族が受け継ぎます。

※ 前列一番右端が松尾俊治

あなたのご支援が紡ぐもの

このプロジェクトにご支援いただくことは、単に書籍の復刊を支援するだけでなく、平和への祈りを形にする活動に参加していただくことを意味します。支援者の皆様は、記録を遺す活動の一員となり、世代を超えた繋がりと感動を体験していただけるでしょう。
当時の学生たちの想いを、お子さまやお孫さまに伝えることで、平和な日常がいかに貴重なものかを実感していただけるはずです。

未来への架け橋として

戦争は過去の話ではなく、今もなお多くの命が失われています。また、様々な問題を抱える日本においても、対岸の火事ではありません。多くの皆さまの思いも込めて『最後の早慶戦』を後世に残したいと思います。
皆様のあたたかいご支援を心よりお待ちしております。

特別賛同者

福澤 武	元慶應義塾評議員会議長
安西 祐一郎	元慶應義塾長
麻生 泰	(一財)慶應連合三田会会長
竹田 恆和	(公財)日本オリンピック委員会名誉委員
對馬 好一	三田体育会会長
奈蔵 稔久	前三田体育会会長
深澤 晶久	三田倶楽部会長
後藤 寿彦	元慶應義塾大学野球部監督
鬼嶋 一司	元慶應義塾大学野球部監督
青島 健太	参議院議員
八尾 和夫	前神宮ネット裏三田会会長
都倉 武之	慶應義塾福澤研究センター教授
高谷 正哲	(株)masatakaya 代表取締役

発起人

中野 明子（旧姓松尾）	『最後の早慶戦』保存会名誉会長
中野 雄三郎	『最後の早慶戦』保存会会長
藤田 久美子（旧姓中野）	『最後の早慶戦』保存会副会長
中野 泰三郎	元（公財）日本バレーボール協会会長
中野 蓮香	『最後の早慶戦』会員
藤田 祥吾	（株）FJリアルティ代表取締役

『最後の早慶戦』保存会